

私の手元に、セピア色に染まった1999年7月25日付の山陽時評がある。当時のノートルダム清心学園理事長、渡辺和子先生が、かつてハンガリー動乱など多くの国際問題に手腕を発揮した国連事務総長のハマーシヨルドについてつづついている。表題は「夜は近きにあり」。彼の日記の年頭に常に出てくる「夜は近きにあり」は「死の訪れ」を指していたのではないかと。在職中の61年に飛行機事故で急死したハマーシヨルドが己の身に起きる一つ一つのことを受託しながらも、日々を丁寧生きようとした様を紹介している。

昨年10月、この記事が強く思い出す出来事があった。私は3月に続き、

山陽新聞を読んで

AMD A理事 難波妙



ウクライナ避難者支援活動幼稚園を訪問した。先同部から子どもたちの点に差しかかったと言動を継続するために再びに避難してきた子ども心のケア、どうすればえる」と締めくくってハンガリーに赴いた。ウは、後から避難してく戦争を止められると思える。次の世代にどうクライナ国内の団体と電る子どもに自分が覚えうか等のインタビュー世界の平和を紡ぎ、つ話で活動内容を協議してたハンガリー語を教えを受けた。現場を見てないでいくのか。2020年、報道の役割は望んでいるのは、対立き合い答えた。部員は大きな分岐点に立ってではなく対話であること地域経済に与えた影響あるのは、「夜」ではとをウクライナの子どもにも注目し、実態調査も行い、まとめて発表もなく、希望に満ちたもから学んだ。

報道が紡ぎ、つなぐ世界

いた時、突然の中断。担12月28日の紙面です。「多角的に物事をみる力をつけたい」ともが願っている。山陽当者の息子がキーウで戦は、岡山南高新聞部がウクライナ侵攻を「自思いうようになり、普段新聞が世界をどの視点死、そしてその遺体を探ウクライナ分事」として捉えるたの生活が変わってきたから伝えるのか、これかうとこのだ。絶句しめ学校新聞で特集を組た」と意識変容の過程から注目していききた。彼らにとって、「死」んだ経緯を、日本NIを振り返っている。い。E学会の「NIE生徒大みそかの社説ではは常に近くにあると思いい研究発表会」で説明。「第2次大戦以降、世知らされた。最優秀に次ぐ優秀研究界平和を保つために築はウクライナの子どもた賞に選ばれたことを伝かれてきた国際協調のちも一緒に預かっている。実は私は、

「山陽新聞を読んで」は月2回、日曜日に掲載します。